

感動不足

2021. 3. 10

ここ数年で、めっきり運動不足に陥ってしまった。まったくとっていいほど、普段は運動をしていない。このままではまずいという意識だけはある。

今の社会は運動不足よりも「感動不足」のほうが深刻だという方がいる。その方は、「感動」という心の運動を大切にしている。どんどん新しい挑戦をするのは、「感動を追いかけているからかもしれない」と述べている。

新たに何かを始めることの中には、心が躍動するきっかけがたくさん詰まっている。何歳になってもこれまで知らなかった自分の姿を知り、それが感動に繋がるという。例えば、日常の中でいつもとちょっと違う道を散歩してみる、久しぶりに美術館に行ってみる、そういう小さいことでもたくさんの発見や感動を得られるはずだという。

運動不足の私は、果たして感動不足だろうかと考えてみた。結論はすぐに出た。そんなことはない。毎日のように感動している、心が動かされている。それが学校という場であろう。学校は感動の連続で成り立っている。

それにしても、年々すぐに涙するようになってきている。校長室で生徒と話しているだけで涙が浮かんでくることがある。重症である。校長室で話していると、大抵こちらが泣かされてしまう教員がいる。相手も泣いているので、二人で泣くことになる。客観的にみて不思議な光景である。

そういえば、全校生徒の前で話していて泣きそうになったこともあった。自分の話に感動しているのか。そんなはずはない。話しているうちに思い浮かんでくることがある。そのことに対して涙が出てくるのであろう。

映画やテレビドラマを観ても泣くことが多くなった。困ったものである。一人ならばいいが、大抵の場合、近くに人がいる。文章を読んで泣くのは、昔からのことである。若い頃でも泣かされてきた。灰谷健次郎さんの作品、重松清さんの作品をはじめ私を泣かせてくれた作品は数多い。

学校には、毎日のようにドラマがある。そこには悲喜こもごも、喜怒哀楽がある。若者の成長物語がある。心が動いた結果、涙する。それは決してわるいことではない。泣くことがわるいことだとは思わない。梁川高校で働くようになり、以前にも増してそう思うようになった。

本校の生徒に泣かされるのは、その生徒が背負っているもの、その生徒の将来のことにまで思いがいくからではなかろうか。心から応援したくなるのである。まさか梁川高校に来て、こんなに泣かされるとは思わなかった。泣く場面などないだろうと思っていた。現実はずっとの逆だった。毎日、感動ドラマが放映されているかのようなのである。それだけ登場人物のキャラクターや思いが濃い。

おかげで感動不足の心配はないようである。問題は運動不足のほうである。思い立って、昨年10月からトレーニングジムに通うことにした。だが、案の定、通った回数はさほどではない。瞬発力はあるのだが、私には持続力というものがない。これは昔からそうである。いつでも行けるから、結局は行かない。

何よりもランニングマシンに乗って走っていても感動がない。走行距離や消費カロリーの数字を見ても感動することはない。心が動かされることはない。これからは感動できる運動をするしかないのかもしれない。